

論 説

大学入試における選抜方法についての研究

宮地元彦¹⁾ 斎藤泰一²⁾ 美祢弘子³⁾ 橘 智子⁴⁾

川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科¹⁾

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科²⁾

川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科³⁾

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科⁴⁾

(平成10年 5 月20日受理)

A Study on Devising a Better Entrance Examination for Universities and Colleges

**Motohiko MIYACHI¹⁾, Taiichi SAITO²⁾
Hiroko MINE³⁾ and Tomoko TACHIBANA⁴⁾**

1) Department of Health and Sports Sciences

2) Department of Nursing

3) Department of Clinical Nutrition

4) Department of Medical Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

(Accepted May 20, 1998)

Key words : entrance examination, multiple-choice test, interview, essay,
high school confidential report

Abstract

At the present time, universities and colleges are faced with the problem of declining applicant pools due to a decrease in the number of eligible 18 years-olds. As a result, every university and college has a sense of impending crisis and each is endeavoring to devise a better entrance examination system in order to select the best students possible.

In this study, the problem was considered from the following viewpoints : (1) The basic problems of previous entrance examinations (the problem with multiple-choice test), (2) The advantages of an interview and essay process, and (3) The relationship among the high school confidential report, the English mark on the entrance examination and the students' grades at the university,

As a result of the discussions, it was decided that the entrance examination is a vital part of the education process, and must be given with scrupulous care. There should be subjective questions as well as a multiple-choice test in the written examination, and a proper interview or a good essay theme which reveals the applicants' individuality and personality should be incorporated as a part of the evaluating process.

要 約

18歳人口の大幅な減少に伴い、大学冬の時代を迎えつつある昨今、優秀かつ個性的な学生を確保するために、それぞれの大学において入試制度のあり方が問われている。本学とてその例外ではない。そこで、本稿では入学試験のあり方を (1)学力試験の問題点 (特に多肢選択問題形式の問題点) について、(2)学力試験以外の選抜方法について、(3)本学学生の在学中の学業成績と高校評定値および入試成績との関連、といった観点から論述した。

以上の検討の結果、入試は、教育の中で重要な位置を占めているという発想のもとに手抜きの試験をしないということ、具体的には筆記試験には多肢選択問題のみでなく記述型の試験を行うこと、面接や小論文はそれなりに内容を吟味し、幅の広い、個性のある、人間性の豊かな人物を選ぶことの重要性が示唆された。

はじめに

昨今の少子化に伴い西暦2006年には、一部有名大学以外は事実上全員が入学可能となり大学倒産の可能性が高まる大学冬の時代を迎えようとしている。

「18歳人口の減少」に伴い、各大学はサバイバルをかけてカリキュラム改正、経営改革を目指し創意工夫している。日本の社会全体が現在までの教育の在り方を反省批判しつつ、21世紀の教育の方向付けを模索している。特に文部省は、平成9年の第16期中央教育審議会における大きなテーマとして、子供たちの豊かな心と人間性の回復と大学入試改善を結びつけ、入試の多様化をアピールしている。その中で一点刻みのペーパーテストで合否を決める入学者の選抜方法を見直し、総合的、多面的に評価することや、大学入試センター試験の改善についても言及している。また、形式的な平等の重視から個性の尊重への転換ということも主張されている。

教育者も親も偏差値でしか子供の能力・人格を判断しなくなっている。子供の個性を伸ばそう、何か一つのことに優れていればその能力を評価すべきと理屈ではわかっているが、現実問題としてうまくかみ合わず、そのジレンマの中

で結果的には子供の個性・能力は二の次となり、まず有名中・高・大学への進学を選択させている。学校の成績のみで大学への進学や就職、そしてライフスタイルまで決まるという教育制度のあり方を打破しない限り延々と悪循環は続き、社会も人間も変化しないであろう。つまり偏差値教育を受けた大半の人間が政治・経済・教育のトップに立ち、支配するとすれば月並みなことしかできず、個性的な特色を出すことなどとうてい期待できない。

したがって、これからの日本の学校教育には「とらわれない」「こだわらない」新しいことへの「チャレンジ精神」を大事に育成できる学校システムを導入すべきであろう。つまり教育の画一的平等主義から脱皮し、個々の能力や適性を持つ学生を育てることが肝要と思われる。

次に文部省が打ち出した大学入試改善に追随して、どの大学も入試のあり方について本格的な取り組みを始めている。ペーパーテスト中心の入試方式に加えて面接・小論文を課す大学が増加しているが、大学としてまず考えるべき点はどんな資質の学生を受け入れ、どのように教育し、社会のニーズに応えられる学生を世に送り出すかという一貫した教育ガイダンスを明確にすることである。そのためには教員も社会の

政治・経済などの動向を把握し、実学的に教育を施すように努力しなければならない。まして少しでも優秀な資質を持つ学生（人材）を集めようとすれば、入試が多様化するにつれて多面的な評価など丁寧な入試を行わねばならない。そのためには「アドミッション・オフィス」の整備など入試に対する体制作りが必要である。

川崎医療福祉大学においても入試制度のあり方が問われている。特に特別推薦・推薦入試の場合の面接や小論文について、それに学力テストのスタイルや評価についてである。

1. 入学学力試験の持つ問題について

a. 小学校以来の各種のテストに多肢選択問題が用いられていること。b. その点数の偏差値を出して、全国的に大学のランク付けが行われていること。c. 教師のいうことをよくきき、テストにより点数をとるのがよい学生であるという安易な考え方が教員、学生の間に浸透していること。その根本には、教育に時間と人手と費用をかけないで、手取り早くよい結果だけを得たいと期待している誤った考えがあるように思われる。

(1) 試験問題の形式について

試験の形式には口頭試問と筆記試験とがある。筆記試験の中には論文体テストと客観テストとがある。筆記試験の分類やそれぞれの特徴については、橋本や齋藤ら^{1,2,3)}の先行研究に記述されている。これらをもとに筆記試験の分類について図1⁴⁾にまとめた。

単純再生法は「源氏物語の作者は誰か？」というような問題であるが、自分で思い出さなければ書けない。さらに問題の内容を変えれば論文体テストにもすることができ、文章の中に空欄を残しておいてそこを埋めさせるのが完成法で、誤った図や文章を書いておいてそれを訂正させるのが訂正法、無秩序に並べたものを大小順、作業順、年代順などに並べ変えさせるのが序列法である。これらは簡単な解答を書くだけなので、論文体テストと違って誰が採点しても同じ点数になるので客観テストといわれている。しかし、解答は自分で思い出して書かねばならないので再生形式で、かつ記述式である。

これに対して再認形式の問題は○×式テスト

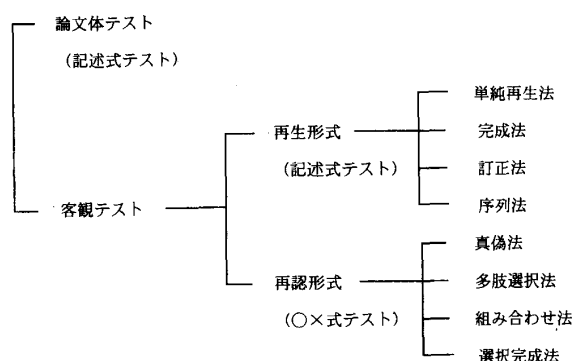


図1 筆記テストの種類

引用文献4) 齋藤泰一(1987)第81回医師国試の総括と今後の展望2. 医師国試対策. 61—67より引用

といわれ、性質が全く異なるものである。真偽法とはそこに書かれていることが正しいか間違っているか、すなわち○か×かを付けさせるものである。答えが書かれているので確認するだけになり、再認形式といわれる。この形式は「最も偶然の中の危険が大きく、また、これで知識、理解をテストしようとするれば、生徒は浅はかな知識、理解しか所有しなくてもりっぱに答えられる」形式である¹⁾。この形式は正答率が二分の一なので、文字も読めない幼稚園児にやらせても、問題数が多ければ50点をとれることになる。それで選択肢を5つ並べてその中から正しいものあるいは間違っているものを一つ選ばせる多肢選択問題が作られた。これは幼稚園児だと20点しかとれないことになる。いずれにしてもこの形式は書いてある答えの中から選び出すだけなので、オリジナルな答えの再生を要求するものではない。確実に記憶しておいたり、自分で考える様な行動を評価するのには適しないことは明らかである。思考のプロセスはわからず、正答していても本当に知っていたか、理解していたかを知ることは全く不可能である。

組み合わせ法は一つの問題に対して複数の答えを書いておき、その中から一つ選ぶ方法で、選択完成法は完成法ではあるが答えが書かれているものの中から選ぶので再認(○×)形式になっている。

医師国家試験など厚生省の行う国家試験問題には多肢選択問題が用いられており、その内容

から3つの形式に分類されている^{2,3)}。すなわち taxonomy 1, 2, 3である。例えばある疾患について、そこに書かれている症状の中からその病気にはない症状一つを選ばせるような問題は taxonomy 1で、症状を並べておいて疾患名を当てさせるのは taxonomy 2である。さらに、症状を並べておいて、疾患名はとばして最初に行うべき治療法を当てさせるのが taxonomy 3である。この最後の問題がよい問題であるとして推奨されている。すなわち、治療法がわかる人は疾患名もわかっているという前提に立っている。しかしそんなものは知らなくても当て推量で治療法を選ぶこともできるし、本当に知っていたかどうかを知る手だては全くない。

(2) 多肢選択問題の欠点

センター試験や各大学の入試問題にも多肢選択問題が用いられ、マークシートで機械が採点している。これらはすべて答えが書いてある中から一つ、あるいは複数の選択肢を選び出すので、受験者の思考過程は問題にされず、当て推量で正答していてもそれを推定する根拠は何もない。この形式のテストを連用していると、自分で考え、努力して問題点を発見したり、興味のもてるテーマを自分で勉強するというのを放棄してしまい、考え方の違いは無視され、個性を失い、ドグマを丸暗記して吐き出すだけの習慣が身についてしまう。独創性はなくなり、権威に対しては無力で従順に従うだけになり、知的自由が無くなってしまう。雪が解けたら何になるかといわれたら水になるという答えは正しいが、春になると答えたら間違いになってしまうのである。

多肢選択問題は2～3題だけでその人の能力を見ることは不可能で、ある程度の問題数を出さなければ正しく評価できないとされている(沢山出したら正しく評価できるかどうかは別問題である)。それで短時間内に沢山の問題を読んで○×をつけなければならないので、素早い条件反射的なスピードが要求されるため、自分で本を読んでゆっくり考えるという習慣が無くなり、クイズを当てる習慣が身についてしまう。○×をつけるだけなので自分の言葉で表現する能力が無くなり、言葉を使わなくなるので思考力が

衰え、論理的な考え方が無くなり、文字も自分で書けなくなってしまう。すべてワンパターンになり、応用力も無くなってしまう。これから脱出するために面接テストや論文体テストが導入されるようになったが、入試だけでなくあらゆるテストから多肢選択問題を無くすることが重要である³⁾。

試験する側は、短時間に多数の受験者の採点をしなくてはならないので、マークシートは有り難い手段である。しかし客観テストといわれる本質を見抜かなくてはならない。客観テストというのは、能力を客観的に評価できるという意味ではなく、採点の時に採点者の偏見が入らない、すなわち機械で採点できるというだけの意味でしかない。試験は教育効果の評価であり、教育システムの中の立派な一つの因子である。教育はマスゲームではなく、手作りで時間をかけて行うものであることをよく認識しなくてはならない。

(3) 多肢選択問題の改善方法

より妥当な入学者選抜のために当て推量無くする問題形式を用いることが重要である。そのために、記述式問題を出すのがよいが、多肢選択問題を用いるとしても、その次になぜその答えを選んだのか、あるいはなぜ他の解答が間違っているのかという根拠を単語や文章で書かせるようにすればよい。当て推量ではこの答えは書けない。

また、問題場面テスト (Problem situation test)¹⁾ と言うのをを用いてもよい。これは単なる記憶の再生ではなく、新しい問題場面を出しておいて反応させ、受験者の知識、理解、技能、分析や総合、推理、判断の能力を動員して問題を解決するアイデアを作り出させるようなテストである。アメリカの医学部入試に用いられている MCAT (Medical Candidate Achievement Test) のように、グラフを示しておいて、いろんな角度から見て説明させるのもこの形式のテストである。これも上述の方法と同様、単語や文章を書かせることが重要である。

(4) 入学選抜方法の改善策とその結果

共通一次試験の導入以来、学生の入試用学力の平均的増加が認められるようになり、教師の

言うことはよくきき、それなりに勉強する学生は増えたが、個性のある人間や自分で考えて目的意識を持って勉強していくという学生が少なくなった。すべてをパターン化して考え、正か誤か、右か左かを選択するだけで、マニュアル通りにしか動かない学生が増えてきた。平成9年9月30日に文部省が公立小中学校で実施した新学力テストの結果⁵⁾を発表したが、自分で考え、表現することを重視する問題を出したら、今までの知識偏重の結果がまざまざと現れ、正答率がきわめて低かった（中学校1年生に対して、地面に立てたポールを利用して太陽の高度を測る方法を図解して記述する理科の問題の正答率が10.4%、おしゃべりしている生徒を陰しい表情の男性教諭が注意している絵を示し、指定された動詞を使って2語以上の英語で注意の内容を書かせる英語の問題の正答率が34.4%など）。こういった現状を踏まえ多くの私立大学や国立大学でも面接や小論文を取り入れ、推薦入学という方法を取り入れるようになった。しかし、現実には面接試験で何を見るか、小論文はどのような目的でどのような能力を見るのかについて大学の教員間で討議はされているが、はっきりした目標や手段もなく、その場の雰囲気で行われていることも多い。それで科学的な内容を含む大論文を読ませていろいろと判断をさせ、文章で書かせる京都大学のような所も出てきた。

大学入試選抜要項で昭和42年度から推薦入学が公に認められ、現在では定着している。それによると、「出身学校長の推薦に基づき、学力検査を免除し、調査書を主な資料として判定する方法」であるが、現在ではもっと進んで自己推薦による方法を取り入れている大学も増えている。「面接を行い、または小論文を課することが望ましい」とも書かれているが、高校の指定校制を取り入れているところもある。1996年度の全国私立大学白書⁶⁾によると、私立の246大学・短大のうち何らかの形（上記のもの以外ではスポーツ・課外活動推薦、付属推薦、外国人・帰国子女推薦、社会人・勤労者推薦、他である）での推薦入試を実施していないのが1大学のみであることや、私立大学の全入学者のうちの33.8%が推薦入試による入学者であるという結果か

らも推薦入試の高い実施状況が理解できる。推薦も自己推薦が導入され、個性的なあるいは特殊な能力を有する学生を入学させようとする大学も増えてきた。帝京大学では一芸入試と呼ばれる、特技を持つ者や特別な活動を行っている者を評価し入学させるという推薦入試を実施している。

学科試験を課さない大学の入試は勉強しなくても入れるというイメージを与え、楽に受験できると認識され、受験者の質も落ち、受験生の数も減少してしまう場合が見られる。高校の推薦では調査書の内容や評定値に学校間差があり、その内容も高校内における相対評価が中心になってしまい、教師の言うことはよく聞き、試験はそつなく通るが気力のない学生を増やすことにつながってしまう。

このように多くの大学で各種の手段方法を用いて入試を改善して有能な学生を採用しようとした試みが続けられているが、高校や入試産業側ではすぐに受験テクニックとしてそれに対応した教育を導入してくる。

2. 学力試験以外の選抜方法について

(1) 面接

面接の目的は、学課の成績とは無関係にその人物を評価することにある。多肢選択問題を用いた試験とその偏差値ならびに高校の成績評価を用いての選択で、思考力や発想の豊かさに欠けたステレオタイプの学生が集まるようになったことへの反省から、面接や小論文による評価が導入されたことを忘れてはならない。

過去の経歴は重要な時もあり、また無視すべき時もある。大臣とは異なり、大学は教育をすところなので、過去に何か不都合なことがあったら一生浮かび上がれないような仕打ちをするべきではない。立ち直れるように教育し、それができたら高く評価すべきである。一般社会では出身校やその成績を無視するようになってきている。

面接で判定するものは、a. 態度、b. 反応性、c. 熱意があるか、d. 回答の内容である。dについては ①適切な知識か、②知識の範囲・領域の広さ・奥行き、③発想の豊かさ、④思考能力、⑤表現法、⑥説得力、⑦人間としての温か

さがあるか、⑧その他、が重要である。

面接は情報収集の一つの手段であるから、できるだけ多くの情報を得るようにする。面接もアメリカの医学部のように何ヶ月もかけ、一人の受験者を何人もの人で面接するところもあるが、日本ではそれほどの所はない。一人ずつに質問して答えさせる方法や、集団で討論させる方法などあるが、質問の内容が建前を答えさせるような問題であってはいけない。そのための条件として、a. 面接者は高い見識、広い知識および人を見抜く目を持っていなければならない。b. 質問する内容は、上記の判定するものすべてを同時に判定できるものであることが望ましい。c. 同じ答えしか返ってこないようなこと、被面接者だけしか知らないようなことは訊かない。例えば「この大学を受験した理由」、「卒業したらどんな仕事をしたいか」、「学生の本分は」、「……のありかた」のようなものである。また「あなたのお父さんはどんな人か」、「高校の校長先生はどんな人か」などというのも、こちらが全く知らないことなのでどんな嘘を話されてもわからないからである。d. 複数の角度から討論できるようなものを選ぶ。複数の受験者を同時に面接する場合、あとから答える人たちが同じ質問に違った答えを出せるような、内容の豊かな広い問題を出す。e. 被面接者を2群に分けて、肯定と否定で討論させるのもよい。

(2) 小論文

小論文や自己推薦書にも、ここを受験した動機や入学後の心づもりなど誰が書いても同じ建て前になってしまうようなテーマは出すべきではない。評価者としてもそれを鵜呑みにできないであろうし、評価の基準を定めることが困難だからである。

一つだけ例を挙げてみよう。「500年前に日本から雀が居なくなっていたら、この世の中はどうなっているだろうか?」という問題を出せば、多くの種類の答えが返ってくる筈である。理系に強い受験者は食物連鎖や害虫、田圃の米から竹藪など生態系に関する文章を書くだろう。文系に強い受験生は伝承文学や民俗学、絵画の世界のことを書くかもしれない。また平素うちの

周りのことをどれだけ観察しているかということも知ることができる。しかし、試験官のほうは何も知らなければ、このような問題を出すこともできないし、受験生の資質を判定することもできない。出題に対して採点するあるいは評価の方法も重要な側面である。

答えが一つではないような問題を出し、さらに採点や評価にも試験官の個性がでるようになるべきである。誰が採点しても同じ点数というのでは特徴のある優秀な学生を選抜する事ができない。しかし、教員に能力が無いとこのような学生を選抜することは難しい。教員一人ずつに責任を持って選抜させ、その学生の経過を卒業後まで追跡調査をして、不適当な学生を入学させた教員はその後何年かは入試業務から外すようなシステムがあっても良いかもしれない。

(3) 内 申 書

入学試験に課せられた試験の点数のほかに、内申書の成績がたとえば4以上といったようなことを条件にしているところも多いようである。しかし、学校差があり、全国の高校の学校差をどのようにして勘案するかが問題である。今回の調査の結果を後にまとめて報告してあるが、学校差を補正した平均評定値と入学後の成績との間には、正の相関関係が見られた。しかし、人物との関係は見えていないので、成績だけからものをいえるかどうかは今後の問題である。入試に用いた英語の成績と学業成績との間にはほとんど相関関係が見られなかった。

3. 本学学生の在学中学業成績と高等学校評定値および入試英語成績との関連

本学では一般入試、高校長による推薦入試、自己推薦による特別入試の3種類の入試が行われている。3種の入試のすべてに英語の学力試験が課せられ、学科によって多少の違いは見られるがその点数にいくらかの比重がかけられている。これでは2つの推薦入試と一般入試の違いが明確にならず推薦入試の意味が薄められてしまうと考えられる。現在のように英語の学力試験の成績を全ての入試で重要視するならば、英語の学力試験の重要性を何らかの形で評価することが必要となる。そこで、本学学生の学業成績を本学入試の英語学力試験の成績や高等学

校在校時の学業成績からどの程度予測できるかを統計的に明らかにし、本学入学者選抜の方法について検討した。

(1) 方法

本学の2つの学科（A学科とB学科）の第1期生から第6期生までの計654名を対象に調査を行った（調査対象には中途退学あるいは調査時に2年以上の休学中の学生13名を含む）。

本学在学中の学生の学業成績を本学で実施される入学試験の成績や高等学校在校時の学業成績からどの程度予測できるかを統計的に明らかにするために、以下の測定項目について調査した。本学在学中の学業成績の指標として各学生の全履修科目の平均点（選択科目含む）を用いた（以下学業成績と略す）。さらに、A学科の卒業生においてはそのほぼ全員がある国家試験を受験しているので、その合否の状況から学生を現役合格者（卒業後最初の国家試験で合格）、浪人合格者（卒業後複数回の受験で合格）、不合格者の3群に分類し、本学での学習の成果を評価する指標として用いた。高等学校在校時の学業成績の指標として本学入学試験時に提出される調査書に記載された全科目の平均評定値を用いた（以下評定値と略す）。本学入試は年に3回それぞれ異なる形式で実施される。入試の科目には英語学力、選択科目学力（国語、数学、理科、社会）の他面接、小論文、適性検査が含まれるが、全ての入試で共通して実施されているものは英語学力テストのみであり、入学学生の選抜の材料として全学的に重きを置かれている。また、調査対象のほとんどの英語学力テスト成績が正確に保存されている。したがって、英語学力テストの点数を入学試験による学生評価の指標として用いた（以下入試英語成績と略す）。ちなみに本学入試の英語学力テストは客観・再認形式・真偽あるいは多肢選択法で行われている。

これらの指標を用いて統計的解析を行うにあたって、さまざまな問題が存在する。高等学校における評定値は絶対評価であることが原則とされているが、評定値の高等学校間較差が存在することが否定できないし、入試英語成績に関しては各試験ごとで問題の難易度が異なるからである。これらの問題点をわずかながらでも緩

和するために、本研究では次のような補正を評定値と入試英語成績に施した。まず評定値に関しては、各学生の出身高等学校の現役国立大学進学者数と学年生徒数を調査し⁷⁾、その比率が20%以上、20%～10%、10%～2%、2%以下の4群に高等学校を分類する。20%以上の学校出身の生徒の評定値には係数1.1を、以下、20%～10%の学校には1.0、10%～2%には0.9、2%以下には0.8の係数を評定値に乗じて評定値を補正した（以下補正評定値と略す）。

入試英語成績に関しては過去の各試験の全受験者の平均点が算出されている。各試験の平均点は55点程度のものがその多くを占めるが、平均点で最も低かったのが45.9点で、逆に最も高かったのが67.5点であった。この各試験の平均点のばらつきは各試験問題の難易度に強く依存しているので、各学生の入試英語成績にはこのような難易度の違いが外乱として反映されると推測される。このような難易度の違いによる外乱を排除するために本研究では、各英語入試試験の全受験者平均点と55点との差を各学生の入試英語成績に加えるか差し引くことにより入試英語成績に補正を加えた（以下補正入試英語成績と略す）。

高等学校在校時の学業への取り組みや入学試験の成績が大学での学業成績や本学卒業後の国家試験の合否に影響を及ぼすとの仮説の妥当性を検定するために、学業成績を従属変数、補正評定値と補正入試英語成績を独立変数として単回帰及び重回帰分析を行った。さらに、A学科卒業生の国家試験合否3群間の学業成績、補正評定値、補正入試英語成績の分布の違いを一元配置分散分析で解析した。多重比較検定はFischerのPLSDを用いた。危険率5%未満を有意として扱った。

(2) 結果

学業成績と補正評定値との間に相関係数0.451、決定係数0.204の有意な相関関係が見られた（図2上）。学業成績は補正していない評定値とも有意な相関関係にあった（ $r=0.368$, $r^2=0.135$ ）が、その相関は補正した評定値よりも低かった。学業成績と補正入試英語成績との間にも統計的に有意な相関が観察されたが、その相

関係数は0.155, 決定係数0.024と低かった(図2下). 学業成績を従属変数とし補正評定値と補正入試英語成績の2変数を独立変数とした重回分析の結果, 相関係数0.463の有意な相関関係が観察され, 各独立変数の標準回帰係数は補正評定値が0.439で補正入試英語成績が0.105であっ

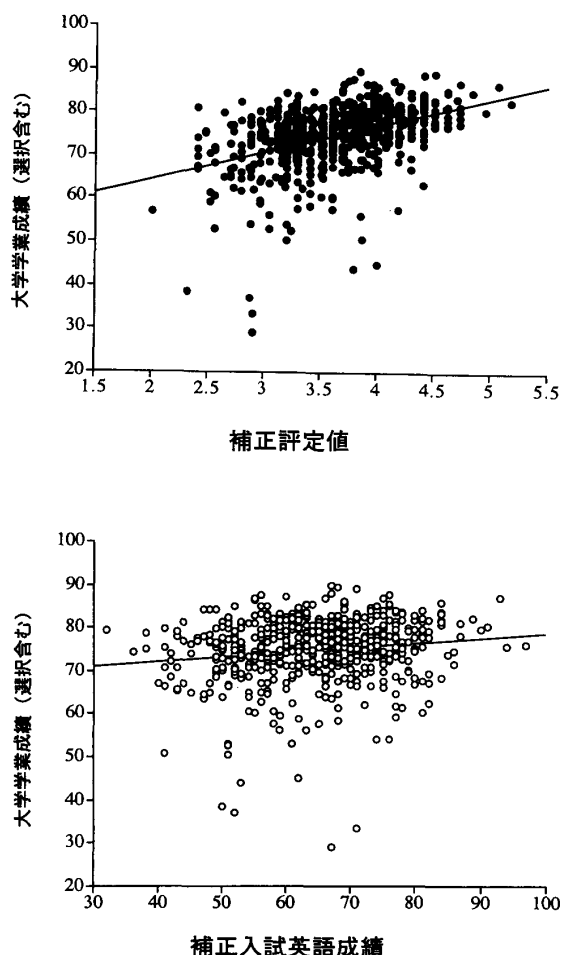


図2 本学在学生の学業成績と補正高等学校評定値(上)および補正入試英語成績(下)との関係
本学学生の学業成績は補正評定値($r=0.451$, $r^2=0.204$)との方が補正入試英語成績($r=0.155$, $r^2=0.024$)とよりも相関が強かった。

た. また, 2つの独立変数間の相関は相関係数0.117, 決定係数0.014と低く, これらがお互いに独立していることが示された. これらの結果は, 大学での学業成績のばらつきのほぼ20%を補正評定値から推測することができること, 補正入試英語成績からは各学生の高校時代及び本学在学中の学業成績をほとんど推測することが不可能なことを統計学的に示唆している。

A学科卒業生の国家試験合否3群間の学業成績, 補正評定値, 補正入試英語成績の分布の違いを一元配置分散分析で解析した結果を表1に示す. それらの結果, 国家試験の合否が補正評定値($F=3.02$)と学業成績($F=12.84$)とに連関があることが示された. 多重比較検定の結果, 国家試験に現役で合格した学生は合格していない学生よりも補正評定値と学業成績が有意に高いことが明らかとなった。

中途退学者と2年以上の休学学生をあわせた13名と在學生との間に評定値, 補正評定値, 入試英語成績, 補正入試英語成績のいずれも有意な差は観察されなかった。

(3) 考 察

本研究では高等学校在校時の学業への取り組みや入学試験の成績が大学での学業成績や本学卒業後の国家試験の合否に影響を及ぼすと仮説した. 本学A学科及びB学科の第1期生から第6期生までの計654名を対象に調査を行い統計的解析を行った結果, a. 大学での学業成績のばらつきのほぼ20%を高等学校在校時の学業への取り組みを反映する評定値から推測することができること, b. 入学試験で重視されている英語試験の成績からは各学生の本学在学中の学業成績をほとんど推測することが不可能なこと, c. A学科卒業後の国家試験の不合格者は合格者よりも高校在校時の学業への取り組みを反映

表1 A学科卒業生の国家試験合否別3群の学業成績, 補正評定値, 補正入試英語成績

	現役合格群	浪人合格群	不合格群	F 値	危険率
学業成績	77.7±4.9	75.4±3.1	73.0±4.9	12.84	<0.001
補正評定値	3.69±0.49	3.61±0.56	3.45±0.53	3.02	<0.05
補正入試英語成績	67.3±11.1	70.3±10.5	63.8±10.9	1.64	N.S.

する評定値や大学での学業成績が有意に低いこと、d. 中途退学者や2年以上の休学学生の高校在校時の学業への取り組みを反映する評定値や入学試験で重視されている英語試験の成績は通常の学生と有意な差がないこと、以上4点が示唆された。

各学科ごとに英語学力試験の合否判定の際の配点比率は異なるし、試験の種類(特別、推薦、一般)によっては英語の他に選択科目学力試験、面接、小論文、適性検査などが合否の材料となるので短絡的に結論することができないが、英語学力試験で良い点数を獲得すれば本学入学試験に合格できる率が高まるのは事実であろう。それにもかかわらず、入試英語成績が良い学生が大学での学業成績が良いわけではなく、また卒後の国家試験の成績が良いわけではないことが、本調査の結果は示している。それに対して本学学業成績や卒後の国家試験の合否と関連の見られる高等学校在学中の評定値は、学科によってその利用の仕方は異なるであろうが推薦入試の出願制限に用いられる程度である。これらの結果は本学の(少なくとも調査対象となった2学科の)今後の入試の在り方を考えるうえでの一つの材料となりうるであろう。しかし、これらの結果から、短絡的に入試から英語を外せば良い人材が確保されるという結論にはつながらない。他の入試学力試験科目(国語・数学など)や面接・小論文といった因子についての検討が行われていないためである。また、渡辺が行った一連の研究によると^{8,9,10)}、入試から英語学力試験を外すことを決定するに十分な客観的データは少なく、入試からの英語排除が、高等学校の英語教育にも大学における教育にも取り立てて大きな利益を与えないことが示唆されているからである。

中途退学や長期休学はその動機によって全て同様に扱うことは困難であるが、その数を減少させることは重要な課題である。退学や休学の原因はそれぞれの学生によって異なるが、入学試験の段階で退学や休学をする可能性のある学生を知ることができるか否かは興味深い問題である。しかし、本調査の結果では退学者や休学者の補正評定値や入試英語成績が他の学生より

も劣っていることはなかった。高等学校時代の評定値や英語入学試験の成績のような学力からは退学や休学する可能性のある学生を知ることが困難なのかもしれない。本研究のような統計的な手法のみならず、退学者や長期休学者の動機を個別に検討するような手法も、その原因を解明するためには必要であろう。

ま と め

受験者の数が大学の定員に満たないような時期が来た場合の入試は、これまでのように多くの入学希望者の何らかの欠点を見つけて排除する方法であってはならない。むしろ、少人数の入学希望者の長所を見出して選抜し、さらに受験生に不足している点を見出し、あるいは大学に何を求めているかを聞き出してそれを補完する方法を、大学側と学生側がともに考えて行くものになるであろう。また別の観点から特別入試を社会的なマイノリティーのために実施している大学もあり、当大学においても参考にするべきであろう。

このため、入試のあり方以上に入学後のカリキュラムが重要になって来るであろう。これからの大多数の大学は、大学院を前提とする場や学者の卵を育てる場ではなく、一般の社会生活を送るようになる学生の希望を聞き、学生の持っている可能性を引き出すためのシステムや環境の整備に力を注がなくてはならなくなるであろう。すでに慶応大学の湘南藤沢キャンパスではこのような考えの沿った様々の試みを実施している。当大学においても、魅力的なカリキュラムを編成し、未来のある可能性を秘めた受験者を集められるように、すぐにでも活動を始めなければならない。

入学試験は、よい学生を集めるためには最適な方法を用いなければならない。従来の方法の欠点を考察し、改善策を提案したい。

入学試験は、教育の中で重要な位置を占めているという発想のもとに、手抜きの試験をしないということが大切である。筆記試験には多肢選択問題を用いないで記述型の試験を行うこと、面接や小論文はそれなりに内容を吟味し、幅の広い、個性のある、人間性の豊かな人物を選ぶ

ことが大切である。それには教員の資質がまず問われていることを自覚しなければならないと考える。

本研究は平成8年度川崎医療福祉大学プロジェクト研究費（研究代表者：橘智子）によって遂行された。記して謝意を表する。

文 献

- 1) 橋本重治(1974) 教師自作テストのつくり方―思考・創造・理解・技能などの作問法―, 日本図書文化協会, 3版, 東京, pp 28―28.
- 2) 斎藤泰一, 有田清三郎, 那須郁夫(1984) 多肢選択テストが医学教育に及ぼす影響. 医学教育振興財団研究助成による研究報告書.
- 3) 斎藤泰一(1988) 多肢選択問題の形式が内蔵する特性と, それが教育に及ぼす影響. 昭和62, 63年度文部省科学研究費補助金 一般研究C(研究課題番号: 62510149) 研究結果報告書.
- 4) 斎藤泰一(1987) 第81回医師国試の総括と今後の展望2. 医師国試対策, 61―67.
- 5) 朝日新聞(1997) 9月30日, 30面.
- 6) 全国私立大学教授会連合編(1996) 第6次全国私立大学白書, pp 83―87.
- 7) 毎日新聞社編(1997) 別冊サンデー毎日97'大学入試全記録, pp 66―243.
- 8) 渡辺良典(1997) 入試から英語をはずすと授業は変わるか―授業研究に基づいて予測する―. The English Teacher's Magazine, Sept: 68―71.
- 9) 渡辺良典(1997) 大学入試の波及効果(上)―授業研究から考察する―. The English Teacher's Magazine, Jan: 68―71.
- 10) 渡辺良典(1998) 大学入試の波及効果(下)―授業研究から考察する―. The English Teacher's Magazine, Feb: 78―79.